

ソーシャルワークに挑む

社会福祉法人ラーフ理事長

毛利 公一

私は、「挑壁者」のソーシャルワーカーです。挑壁者という言葉は、聞き覚えのない言葉だと思います。なぜなら、私が作った言葉だからです。冒頭にこの言葉から入るのは、原稿を寄稿するにあたって不適切なのかもしれません。ただ、これが私のソーシャルワーカーとして、果たしたい夢の一つですから、敢えて使わせていただきました。単刀直入に、ソーシャルワーカーとして果たしたい夢は、「障がい者という言葉がなくし、挑壁者とするパラダイムシフトを起こしたい。(マイナスイメージからプラスイメージへ)」ということです。

「皆さんは障がい者についてどんなイメージがありますか？プラスのイメージですか？マイナスのイメージですか？」私は講演活動で、よくこのような質問をします。講演を聞いてくださる方が、福祉関係者でないところでは、9割9分の方が、マイナスイメージだという回答が返ってきます。(回答の時は、目をつむって手をあげていただきます。)私は障がい者という言葉が嫌いです。実は私は、障がい者、むしろ重度障がい者と呼ばれる身体状況であり、一種一級の身体障害者手帳も所持しています。私がこのような状況だから嫌に思ったわけではありません。昔から感じていました。害に障る人と漢字で表記される障がい者…ひどいです。確かに私自身も、障がいがない身体の時、障がい者はいろいろなことができない人、社会的弱者等のマイナスイメージを持っていました。最近では、漢字で「害」という言葉を使わないようにしている場合もありますが、「しょうがいしゃ」と発音して使っている間は、イメージは何も変わりません。

しかし自分自身の身体に障がいができる時、前述のようなマイナスイメージはなくなりました。そして、今は障がいもしくは障がい者のことを、こう考えるようになったのです。「障がいは壁。そして障がい者は、その壁を、何とかよくしていきたい、何とかできるようになりたい、と挑戦しているのではないか。」と。このような発想で、私の中からは障がい者が消え、挑壁者という言葉が生まれました。いかがですか？壁に挑戦している人と書いたこの挑壁者の方が、少しだけプラスのイメージができませんか？

ここで私の、福祉やソーシャルワーカーとの出会いについて少し触れたいと思います。話は2004年にさかのぼります。当時の私はスポーツマン(棒高跳び選手)で、全国大会で入賞した経験もありました。大学まで競技を続け、将来棒高跳びのコーチか体育教師になろうと思っていました。その知識と経験をさらに深めるため、23歳で渡米し、その留学先で今のけがを負いました。障がい者福祉とは無縁だと思っていた私が、突然世間一般で言われる障がい者になりました。私が医師から告げられた診断名は、C3レベル頸髄損傷。

状態は完全麻痺。今後は、一生寝たきりで一生呼吸器の生活というものでした。その後 15 日間で、リハビリ施設への転院を強く勧められました。さすがアメリカです。

私は両親とともに、エアアンビュランスという、飛行機版の救急車（小型）をチャーターして、何とか日本の病院へ帰ってきました。この頃からです。ソーシャルワーカーに出会い、関わり出したのは。次のリハビリ病院をどうするか、自宅に帰るか、自宅に帰った場合はどのように生活するか、という課題に対して相談にのってくれ、すべての質問に、専門的な知識と経験から回答してくれました。その時の私たち家族にとって、ソーシャルワーカーは大変大きな力になってくれました。

それから数年後、私は NPO 法人ラーフ（現：社会福祉法人ラーフ）を設立します。この法人で、居宅で生活せざるをえない重度の障がいがある人へ、居宅介護だけではなく、その他の専門的な訪問サービス（ヘアカット、マッサージ、鍼灸、パソコン教室等）を提供しようと考えていました。そして、利用者様にそのサービスで元気になってもらい、一歩でも外に出る意欲にしてもらいたいと望んでいました。この活動はすぐにマスコミが興味を持ち、大きく取り上げられました。その反響が、思っても見ないほうへ私を動かしていきます。沢山の挑壁者が、私に相談しにくるのです。どうやったら自宅に帰ることができますか、どうやって働いているのですか、ヘルパーさんをどうやってお願いするのですか等。経験上のことは相談に乗ることができましたが、制度のことや、福祉サービスのことについては、一部しかわかりません。もしかすると私は、この時ソーシャルワーカーみたいなことをしていたのかもしれませんが、しかし、とても軽率なソーシャルワーカーでした。実際、裏付けとなる知識や理論なしに、人の相談を受けることへ怖さを感じるものがあったからです。そこで私は、法人の経営を行い福祉現場の実績を積みながら、日本福祉大学の通信教育学部で、6 年間かけて社会福祉士と精神保健福祉士の資格を取得しました。取得後すぐ、香川県ソーシャルワーカー協会の川西会長に推薦され、今は本協会の理事を任されています。

今年私は、上述したソーシャルワーカーとして果たしたい夢を前に進めるため、挑壁者創出プロジェクトと題して、ソーシャルアクションを起こしました。私は、このプロジェクトで、まず 2015 年 7 月に、社会へ障がいがある人が弱者ではないことや、障がいがある当事者や家族を元気付けるための『夢をかなえる挑壁思考』を執筆しました。そして、この本をユニバーサル化（電子書籍化、点字化、英語化）し、誰もが読める形で全国の特別支援学校に寄贈しようと現在も活動中です。児童、保護者の皆様に生きる（活きる）勇気をお届けしたいと考えています。そのため、今年の 4 月から 5 月、クラウドファンディングという手段で資金集めを成功させました。先にも書きましたが、私は自分の「障がいを壁」だと思い、それに挑む挑壁者という言葉を作り生きています。今回このプロジェクトで 1 人でも多くの挑壁者を創出したいです。そして社会の中での、障がいがある方へのイメージをプラスイメージに変えて行きます。

私が考えるソーシャルワーカーは、理論や知識も必要です。様々な経験も必要です。そして行動に起こす実行力も必要です。必要な能力はもっと沢山あるかもしれませんが、それらのバランスが何より大事だと思っています。より高いレベルのソーシャルワーカーとなるため、それらのレベルをどんどん高めていきたいです。また、今は私が得意とするのは、障がい者福祉分野ですが、高齢者福祉分野も、児童福祉分野も、地域福祉分野も、総括したジェネラルなソーシャルワーカーでありたいと思っています。

私は地域でも数少ない、挑壁者のソーシャルワーカーです。障がいがある当事者の目線を持ち、人や団体や制度へつなげたり、クライアントのエンパワーメントを高めて、1人でも多くの挑壁者を支援したいと強く思っています。